

奥多摩・秩父の旅 2020



2020年6月

旅のチカラ研究所 植木圭二

新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が一応解除になった。とはいいつつも世の中では自粛ムードがある中、私は先陣を切るように旅に出た。旅行先は首都圏4都県の中でも比較的自然が多く人が少ない奥多摩と秩父を選び、メンバーは船旅で知り合った友人たちである。

■旅の始まり

私が運転する車は多摩川沿いを奥多摩湖目指して快調に走っている。最初は遠くに眺めていた新緑の山々も徐々に近づいている。車内には鳩原（にゆうはら）さん、田中さん、竹田さんという人生の大先輩たちが乗っている。私を含めこの車に乗っている4人の年齢の合計は300才を超えている。

このメンバーはピースボートの船旅で知り合った仲間で、船を降りても今回のように定期的に旅行に出かけている。

と、ここまでは半年前に山梨県に行った「甲斐の旅 2019」の旅行記の冒頭とほぼ同じになっているが、今回の旅は半年前の旅とは大きく異なる。

それは新型コロナウイルス感染症のために日本中が自粛ムード一色になって、私もここ3カ月間旅行をしていなかったことだ。

そんな時に鳩原さんから届いたメールには近況報告などが書いてあったが、行間には早く旅に出たいという思いがにじみ出ている。私はその思いを察知して「緊急事態宣言も解除されたので、そろそろ行きませんか？」と単刀直入に返事を返した。これに対して返信がすぐに返ってきて、「具体的に提案お願いします」と書いてあった。私はいくつかの旅のプランを提案し、その中の奥多摩・秩父の旅に決まった。そして宿を予約しながらのメンバー集めになったが、これらのやり取りは1日くらいだった。最初に声をかけた田中さん、竹田さんからはすぐに参加表明のメールが届いた。

実は別の友人たちを旅行やゴルフに誘ってもいい返事がもらえず、緊急事態宣言が解除されても様子見をしており、むしろ「お前、この時期に何考えているの」という冷ややかな反応が多かった。しかし私より 20 才以上も年上の大先輩の鳩原さんは違った。とにかく生活を前に進めることを選択する、そのあたりの感覚が長い間人生を楽しんできた秘訣かもしれない。

そんな諸事情を鑑みて今回の旅は公共交通機関を使わずに、行先は首都圏の 4 都県内に限定して、人が少なくオープンエアの場所、さらに宿は感染症対策がしっかりしていそうなところを選んだ。

■奥多摩湖

最初の目的地は奥多摩湖、言わずと知れた東京都民の水瓶で小河内ダムによって堰き止められた人造湖だ。東京都奥多摩町にあつて標高 530m に位置している。

私たちが着いたのが日曜日の昼近くで、人も車もそれなりに多くて駐車場の空きスペースがなかなか見つからない。自粛の解除にともない東京都内にありながら、三密（密集、密閉、密接）を避けて空気の良い奥多摩をとりあえずのドライブ先に選ぶのは誰しも考えることだろう。



<奥多摩湖 前方は堤防と展望塔>



<小河内ダムの堤防を展望塔から覗く>

小河内ダムは由緒正しいダムである。コンクリートを主要材料としてその自重によって水圧に耐えるので重力式ダムと呼ばれており、日本では広く用いられている方式のダムだ。堤防の高さが 149m、堤防の長さは 353m とかなり大きい。第二次大戦前の 1938 年に着工し、私が生まれた翌年の 1957 年に完成した。それから 60 年以上、いわば私と同年代のダムなので親近感がある。人間ならば定年退職の年齢なので、よくここまで頑張ったなと声を掛けたくなるほどだ。

貯えられた水はダム直下の発電所で発電に使用された後は、多摩川に放流されて小作取水堰と羽村取水堰で取水され各浄水場へ送られる。

完成当時の東京都は多摩川水系が主な水源だったが、現在は群馬県の利根川水系が東京都の主要水源になっており多摩川水系の割合は約 2 割しかない。群馬県にダムを造ることによって東京都民に水が供給されるという構図に変わっている。つまり都会の便利な生活は田舎の犠牲の上に成り立っている。このあたりのダムの話は旅行記「宝川温泉の旅 2018」で詳しく触れており、今回は触れないが是非読んで欲しい。

ダムと言えばダムカレー、そのダムカレーを期待して私たちはダムのすぐ横にあるレストランに入った。

ダムカレーとは、カレーライスをもダムに見立てたものでダムの構造を模して白米で堤防を作ってダムの水に見立てて片側にカレーを貯めた構造になっている。日本全国では140種類以上のダムカレーが存在しており、ダムの近くでは名物になっているところも多い。日本ダムカレー協会なるものまで存在しているから相当なものだ。

小河内ダムは由緒正しいダムなので、当然ダムカレーがあるかと思ったが残念ながらダムカレーはなく、カツカレーでお茶を濁すことにした。しかしこのカツカレーは予想外に美味で、こういう誤算はありがたい。

■武蔵御嶽神社

奥多摩地方ではここは外せないだろうというのが武蔵御嶽神社で、そこを目指して車を走らせる。それは由緒正しい武蔵御嶽神社で新型コロナウイルス退散祈願をするためで、苦しい時の神頼みという心境かもしれない。

武蔵御嶽神社は標高929mの御岳山（みたけやま）の山頂にあり、御岳登山鉄道のケーブルカーで山頂近くまで連れて行ってってくれる。これを使わないと標高差423mを歩いて登ることになり、300オカルテットにはかなりきつい。それでも登山の装備をした人たちも多く見受けられるので昨今の登山ブームでは歩いて登る人も多いのだろう。

このケーブルカーは1934年開業ということで第二次大戦の前から運行している。そしてその年は奇しくも鳩原さんが生まれた年だが、どちらもその年齢には見えない。

ケーブルカーの営業距離は約1kmと短い、かなり急な斜面を登る。その最大勾配は25度もあるからかなり凄い。三密を避けるために乗車定員は通常の半分以下の50名にしている。それはちょうど座席が全て埋まるくらいの人数になるが、わずか6分間という乗車時間なので立っている人も多い。混み合いもせず、かといって寂しさもなく快適な人数の運行に私は満足している。



<ケーブルカー 車両を引きあげる一本のロープが見える>

ケーブルカーを降りてから武蔵御嶽神社を目指して歩き始める。10分くらい歩くと宿坊が立ち並ぶエリアがある。風情のある宿坊が20軒くらいはあるだろうか、私は興奮気味に「この宿もあの宿も実にいいですね、今度来るときはここに泊まってみたいですね」と田中さんに声を掛けると、彼もまた感動したようで即座に大きくなずいてくれる。

偶然に見つけた懐かしい看板を掲げた宿がある。それは何とユースホステルの看板だった。こんなところでユースホステルかと、私は正直驚いた。それは日本中、いや世界中から多くの若者たちが訪れるという証拠でもある。やはりここは由緒正しい神社だった。いや神社だけではなく山そのものがご神体という独特の空気感があるからだろう。



<風情ある宿坊>



<ユースホステル>

宿坊エリアを抜けると坂道になって最後は約330段の階段が待ち構えていた。ケーブルカーの終点から山頂までの標高差は100mくらいだが、この330段の階段は年配者にはかなり辛そうだった。そのため300オカルテットの速度は大幅にペースダウンし、それでも何とか頂上の本社までたどり着くことができた。それにしても自粛生活による運動不足や、家にばかりいて体重が増加したなどと、皆ひたすら言い訳をしているのが面白い。

本殿は山の上なのにかかなり立派な造りで、もちろん私は新型コロナウイルス退散を祈願した。



<330段の階段>



<境内より下界を臨む>

私にとってはこの神社は初めての参拝なので、立て札に書かれている説明を読むとその内容に驚いた。始まりは崇神天皇によって創建されたというから紀元前1世紀頃のことだ。そして奈良時代の736年に僧の行基（ぎょうき）が仏像を安置したといわれている。行基は当時の人々から圧倒的な支持を得ていた僧侶で、そのため奈良の大仏建立の実質上の責任者にもなった。神社に仏像という組み合わせ、この頃から神仏習合が始まったということを物語っている。

鎌倉時代に社殿を再興し、以降は修験場として知られる。武士から多くの武具が奉納される。江戸時代に入って本社、その後に幣殿と拝殿が建立された。明治時代に神仏分離令によって仏教を排除して、昭和になって現在の武蔵御嶽神社に改称した。

日本の典型的な神社の歴史を背負ったような神社だ。

この神社一帯の山は古くから関東の霊山として信仰されてきて、魔除けの神「お犬様」として親しまれてきた。自然を敬う人々の信仰心が今も脈々と受け継がれている。

本殿の奥にもいくつも社（やしろ）があつて、最も奥の社の横には御岳山頂上 929m と書かれた杭が立っている。山頂の向こうにも山々が連なり、谷を挟んで約 1km 先の山には奥の院が見える。その奥の院を拝む遥拝所があるのでそこから奥の院に遥拝し、新型コロナウイルス退散を再度お願いした。



<頂上の社と 929m の杭 奥に遥拝所がある>

実はこの奥の院が「お犬様」に関係している。日本武尊（ヤマトタケルのミコト）が東征した際に山で道に迷っていたら狼に助けられ、その狼にこの山の守護神になれと命じたという。狼も野犬も同じように扱われて「お犬様」になって今に至っているらしい。

日本武尊が武具を奉納したという伝説が残っており、武具が武蔵の語源になったともいわれている。やはりこの神社、そしてこの一帯は由緒正しい歴史の宝庫だ。そのことを若者とではなく、300 オカルテットで歩いたことで、より深く感じる事ができた。

あまり下調べもせずにやってきたが、思わぬ歴史とスケールに圧倒された。関東にあつてこれだけの山岳信仰地帯にはあまりお目にかかれないので、宿坊に泊まって周辺の山歩きをするという旅行企画は意外に早く実現するかもしれない。

■青梅の街は何もない

武蔵御嶽神社で思わぬ時間がかかり、既に夕方になろうとしている。

今宵は青梅の郊外に宿を取っており、その宿に入る前に青梅市内で酒とつまみを買おうかとスーパーマーケットを探すが、これがなかなか見つからない。車で市街地も郊外も30分くらい走り回ったが、結局見つからずコンビニエンスストアに飛び込んだ。それさえも見つけるのに苦労したほどで、これには本当に驚きそして唾然とした。

街はシャッターを降ろした店が多く、いわゆるシャッター通りになっている。しかしかつては山岳信仰の麓の街だったのであるに一体何ということだろう。

青梅の駅近くには「昭和レトロ商品博物館」や「昭和幻燈館」、「赤塚不二夫記念館」があると聞いていた。このうち赤塚不二夫記念館は最近閉鎖され既に建物も無くなっており、昭和幻燈館はたまたま定休日だった。そして昭和レトロ商品博物館は新型コロナウイルスのために閉鎖中で当分開きそうにないらしい。

青梅は昭和レトロな感じが似合う街なので、そのような街おこしをしていた。映画の看板を描く職人が住んでいたのであちこちには懐かしい映画の看板がかかっている。「おそ松くん」で有名な赤塚不二夫は青梅とは無縁な人だが、たまたま彼が若い時に映画の看板を描く仕事をしていたことがあって、街おこしで担がれ記念館までできてしまったということらしい。

今は時代も令和に変わり、赤塚不二夫を知らない世代も多くなり、昭和レトロ自体が陳腐化しようとしている。レトロとは懐古主義とでも訳すのだろうが、昔を懐かしんでいるだけではしょうがないのは明白だ。

日本各地にはレトロや過去の栄光にしがみついている施設や街が多いが、それらのほとんどは単に記念館的なものを作るだけで、そこから未来に向けて何を示したいかというのが何も伝ってこない。せめて“温故知新”、古きを温めて新しきを知るという発想でなければならない。そう思うのは私だけだろうか。

■かんぼの宿

本日の宿は「かんぼの宿青梅」を予約している。

こんな時、かつての私の旅では会社の保養所に泊まっていたが、現在はそのほとんどがなくなったこともあって最近では伊東園ホテルグループや大江戸温泉物語の宿を使うことが多くなっている。

今回の旅行は、先に目的地が決まって宿は後から決めた。そもそも人が多く集まる有名観光地をあえて避けて計画したので、伊東園や大江戸温泉物語の宿はない。しかしご存知のように、かんぼの宿はかつて郵便局の簡易保険加入者用の宿だったので日本全国を網羅するように存在している。もちろん郵政民営化によって現在は一般の人でも普通に泊まることができる。

そのため今回の旅においては、かんぼの宿を利用することにした。青梅という場所は有名観光地とは言い難く、立地条件はあまりよくない。それでも部屋からは新緑の山々と多摩川を臨むことができ、建物は比較的新しくとても立派だ。

さて、この宿は宿泊定員が 160 名ということでそれなりの規模だが、今は 50 名までしか予約を取っていない。やはり新型コロナウイルス感染対策のために、かなり徹底した対策が施されている。

フロントでチェックインを待つ時の立ち位置、エレベータの中でも立ち位置を指示するように床にシールが貼られている。風呂の脱衣場も密にならないようにロッカーは 4 つおきくらいでしか使用できないようになっている。



<エレベータの中の床面>



<脱衣所 ロッカーの鍵は間隔が空いている>

食事処の各テーブルの間は相当に離して座るようになっており、もちろんテーブルに並ぶ椅子の間隔も広々としている。

このような状態は今後いつまで続くのかわからないが、私たち宿泊者にとってはゆったり感があって実に気持ちよくて過ごしやすい。

ついでに館内の至るところには、これでもかこれでもかと消毒液が置かれている。

■夜は楽しい

夜はいつものように楽しい宴会だ。

ピースボートの船旅で知り合った仲間だからなのか、旅行の話、それも国際的な話題が多い。今宵はなぜか「日本も核武装の準備は必要だろう」などという話になった。結論の出ない話題だが、たまにはこんな話も学生時代に戻ったようで面白い。

話の流れで日本の目指す国家の姿になり、私の最近の持論「3カ国連合国家構想」も披露した。これは私が実際に世界各国を旅した経験から感じたもので、日本と台湾とオーストラリアで連合国家を作るという途方もない構想だ。それには皆一様に驚きそして興味を持ってくれた。長くなるのでこの構想の中身には触れることはここではやめておこう。

宴会は夜中の 12 時まで続いた。それにしても年齢の割にはみんな元気だ。やはり百戦錬磨のメンバーだけある。

■不思議な寺院

旅行 2 日目、青梅から秩父を目指す。その途中にある名栗地区は緑が深くて今の時期なら新緑がとても綺麗だと、田中さん一押しルートだ。山奥のその綺麗な景色は田舎の素朴な家々の風景とも相まってとても東京都とは思えない。

そんな道を走っていると鳥居観音という看板が目にとまり、背後の山の上の方に大きな観音像が見える。面白そうなので急遽立ち寄ることになる。

案内看板には、標高約 460m の白雲山一帯に救世（くぜ）大観音、玄奘（げんじょう）三蔵塔や大鐘楼などいくつもの建造物があり、山頂までは車道も整備されていると書かれている。

車での入山料として 1 台につき 500 円を自己申告でポストに入れるようになっている。どうせ誰も見ていないので入れなくてもいいのではという意見もだが、「10 万円もらえるから」ということで 500 円を投入する。

10 万円とは新型コロナウイルス対策で国からもらえる特別定額給付金のことで、我々の仕事は 10 万円を気前よく（？）使うことにあると車の中で誰かが言っている。そしてその 10 万円が今回の旅行の合言葉になり始めている。

5 分ほど車で登って行くと救世大観音と称す高さ 33m の観音像がある。この施設は中東からアジア諸国の世界各地の仏教の様式を取り入れており、まるで世界の仏教寺院の旅をしているような気分させてくれる。

最初は新興宗教の施設と思ったが、そうではなく観音信仰と言ったほうがいいかもしれない。開祖の平沼彌太郎という人は政財界に身を置いた人で、その母親が熱心な観音信仰者だったのでその母の遺言でこれらの施設を造ったという。さらにここにある仏像のほとんどは開祖自らが彫ったというから凄い。



<3 体の久世大観音>



<白雲山一帯 玄奘三蔵塔が見える>

案内板には「四季それぞれに花が咲きほこり、澄んだ空気を満喫しながら自然が生み出す癒しの力と観音様の慈悲によって心が浄化される」と書かれている。

短時間の滞在ではあったが、確かに緑の山々の景色と大観音像や各種施設とが妙な調和をしていて心が浄化される気分になった。結構おすすめの場所かもしれない。

■秩父を巡る

秩父市内にある羊山公園に立ち寄る。この公園は芝桜の丘として有名な場所で、春にはテレビなどで一面に咲く赤やピンクの芝桜が紹介されるが、今の時期はただの緑の芝があるだけでもちろん訪れる人もおらず、閑散としていた。

今年は自粛のために恒例の芝桜祭りが中止になり、公園全体も閉鎖されていたというから、今回は入園できただけでも幸運だったかもしれない。



<羊山公園の「芝桜の丘」 背後に武甲山が見える>



<芝桜が咲いた時の光景>

秩父は昔から信仰の地として有名で、秩父三十四霊場巡りが知られている。この三十四霊場は全てが観音霊場で、先ほどの鳥居観音含め観音信仰が根強いのはこの地域の特徴かもしれない。ついでに西国三十三、坂東三十三の札所も観音霊場になっているから不思議だ。

■秩父三社

観音信仰の謎にも迫りたいが、今回の旅は秩父三社を目指す。三社とは三峰神社、秩父神社、宝登山（ほどさん）神社で、私はどの神社にも何回か行っているがどこもみな由緒正しい。

まず訪れたのは一番遠い標高 1100mの三峰神社で、緑が深くとても気持ち良い。パワースポットとして有名でフィギュアスケートの浅田真央が SNS に載せたら若者たちにも広まった。

秩父といえば“秩父夜祭り”が有名で、京都祇園祭、飛騨高山祭と共に日本三大曳山祭の一つに数えられる。この祭りは秩父神社の例大祭で、その秩父神社は市街地の真ん中にある。

そして長瀬にある宝登山の麓にある宝登山神社を参拝した。

どの神社も新型コロナウイルス感染症対策で、参拝者が清めるための手水（ちょうず）は柄杓（ひしゃく）で取らずに流水に変わっていた。最初に右手で柄杓を取り左手を清めるなどという作法はもはや関係ないのだろうか。感染症は太古の昔からあったはず、とすると清めるとは一体何だろうかと考えてしまう。

キリスト教やイスラム教の神は絶対的存在で創造主だが、日本の神は違う。そもそも日本の神道には教義がないから、神は何も教えてくれず、何もしてくれない。むしろ常に人々の側にあって心の拠り処とでもいうもので、神とは永い年月をかけた人々の営みによる知恵や意思の結集だと私は思っている。

ついでに仏教にも神はいない。修行して“悟りを開いた人”を最高位の如来と呼び、その前段階の人を菩薩と呼ぶ。観音菩薩は修行中の人になる。



<流水に変わっていた手水>

今回私はあることに気が付いた。これら秩父三社と昨日参拝した武蔵御嶽神社とは由来や創建に多くの共通点があることだ。もちろん全く同じではないが、その共通点のキーワードを抜き出すと、崇神天皇が創建、日本武尊の東征、犬（狼）が救ってくれたなどだ。

これらの神社の由来が別の話だとすれば、崇神天皇は当時としては辺鄙な東国の山奥に神社をいくつも創り、日本武尊は関東各地の山にやってきては何回も犬に助けられたことになる。どう考えてもこれらの話の根っ子は同じなのではないかと私は思い始めた。

日本武尊がそもそも実在し、東征したかなど紐解くと切りがないが、現代のように情報通信も印刷もない時代なので、誰がこの国を治めていてどんな顔をしているかなどということは当時の東国の人には知る由もない。きっと西国からやってきた偉い人、あるいは単なる旅人が狼に助けられたという伝承が広まり、我が地こそがその場所だといひ始めるのは現代でもよくある話だ。

ともかくその伝承を上手く活かして、神社は人々の心の拠り処として過去から現在まで存在し、そして未来も存続するだろう。過去に遡り心の拠り処という意味では、青梅のレトロも同じようなものだが、一体何が違うのだろうか。

宝登山神社の背後にある標高 497m の宝登山に登った。といってもロープウェイに乗って 5 分ほどで山頂駅に着き、宝登山神社の奥宮も参拝した。

私一人ならばロープウェイに乗ることもなく山頂にも行かないが、私以外は宝登山が初めてで、それに 10 万円があるから気前が良くなっている。皆口々に「お金を使うことが我々の仕事だ」と言っている。

常に積極果敢に人生を楽しんでいる鳩原さんがこの 3 カ月間不要不急な外出を控えていたことについて「年寄りにとっては全てのことが“不要不急”、そのことに気が付いた」としみじみと言っていたのが印象的だった。



<宝登山ロープウェイから長瀬の街並みを臨む>

■幻のイチローズモルト

秩父蒸溜所というウイスキーのベンチャー企業のような蒸溜所が秩父にある。その秩父蒸溜所のHPを覗くとはジャパニーズウイスキーに誇りを持ち、手づくりこだわってモルトウイスキーを作っていると書いてある。

昔はともかく現在のジャパニーズウイスキーの世界的評価は高い。最近の世界のウイスキーは5つに分けられて、スコッチ、アイリッシュ、アメリカン、カナディアン、そしてジャパニーズになる。もちろんそのことは嶋原さんから聞いた話だ。

嶋原さんはウイスキーのミニチュアボトルのコレクターで、収集した数は2000本以上になる。86才という年齢を考えると誰かにそれらを託さないといけないので、知り合いのサントリーの白州蒸溜所の初代所長に相談したところ、引き取ってもらうことになった。半年前に行った甲斐の旅は嶋原さんのウイスキーが展示された様子を白州蒸溜所に見に行った。

今回も秩父蒸溜所に行こうとしたが、残念ながら現在は新型コロナウイルス対策で見学できない。さらに一般客は最初から見学を受け付けていないという。この騒動が収まったならば、旅のチカラ研究所とスコットランド協会の嶋原さんと組んで何とか見学したい。

さて偶然にもその秩父蒸溜所の樽が秩父神社に奉納されていた。神社で聞いたら秩父神社の前にある酒屋で秩父蒸溜所のウイスキー「イチローズモルト」を売っているという。希少なもので滅多に手に入らないため幻のイチローズモルトと言われている。

実はこの名前、私はプロ野球のイチローが関係しているのかと思ったが、そうではなく創業者の肥土伊知郎さんの名前から付けられた。しかし私のように思い違いをする輩は多いだろうから名前による恩恵はあるに違いない。やはりネーミングは大切だ。ちなみにイチローズモルトの発売より先にイチローはメジャーリーグデビューをしているからイチローを意識して命名したのだろう。このことは秩父蒸溜所を訪問できた時に肥土伊知郎さん本人に直接聞いてみたい。



<秩父神社に奉納されていた酒>



<イチローズモルト>

そのイチローズモルトを今宵の宿で飲もうと購入する。他の国産ウイスキーに比べて少々高く、一番安いものでも3850円の値札が付いていた。しかしこれもまた10万円の合言葉で買った。

■悲劇と感激

2泊目もかんぼの宿で、「かんぼの宿寄居」に宿をとった。この宿も埼玉県寄居町の中心から離れた場所にあつて立地環境はあまりよくない。観光地でもないこの地域に無理やり作ったという感じさえする。

数年前に「秩父往還歩き旅 2015」で歩いたときに寄居を通過したが、甲斐の国から秩父の山を經由して歩いてくると関東平野が広がるその境目の町が寄居で、何もない印象だった。甲斐の国の侍や関東の小田原などの侍が寄って居たところで寄居となったという説がある。

さて悲劇はこのかんぼの宿寄居の玄関で起きた。

新型コロナウイルス感染対策で、宿の玄関にはワンプッシュの消毒用アルコールがあつて、その操作をしようとしてイチローズモルトを落としてしまった。一瞬でビンが割れてイチローズモルトは玄関の床の上一面に広がった。3850円は、はかなく消えてなくなった。幻のイチローズモルトは本当に幻になってしまった。

それでも夜はまた楽しい宴会になった。今宵は国際問題を封印して子供や孫という家族の話になった。あとはよく覚えていない。また12時まで飲んでしまった。

そして驚いたのは朝食で、その豪華さに感激した。昨日泊まった宿の朝食もなかなか豪華だったが、本日の宿ではさらに豪華な朝食が出てきた。あまりに豪華なので思わず写真に収めた。旅の記録に夕食の写真は撮ることが多いが、朝食の写真は撮ることは滅多にない。そのくらい衝撃的な朝食だった。(写真の夕食はこれ以外に味噌汁、ご飯、漬物、デザートがあつた)



<夕食>



<朝食>

この豪華な朝食の理由は直ぐにピンときた。通常ならばビュッフェスタイルいわゆる食べ放題の朝食なのでたくさんの種類の大皿が並んで好きなものを取るのだが、大皿を取り分ける箸やトングに感染リスクがあるので、それら全ての料理が少しずつ盛り付けされて個々のお客に配膳される。だから豪華になるのだが、この朝食は見た目の豪華さだけではなく味も満足できるレベルだった。

ビュッフェスタイルから配膳方法を変えるだけでこうも変わるものかと感心しきりだ。当然ながら完食するのも相当にきつかった。

■荒川ライン下り

3日目の本日は、竹田さんの希望により長瀬で荒川の川下りを体験する。

この川下りもしばらく営業を自粛していたようだが、最近営業を再開したという。乗船前に全員の検温とマスク着用のチェックがあり、さらに定員20名の船には半分くらいしかお客を乗せないで、感染対策には苦慮しているようだ。

私たちの乗った船は“荒川ライン下り”という名前だが、よくよく考えるとおかしい。

そもそもライン下りとはドイツのライン川を下ることなので、荒川ライン下りという表現自体ありえない。木曾川が岐阜県犬山市付近を流れる溪谷付近が本場のライン川に似ているので、その付近が日本ラインと呼ばれている。だから日本ライン下りは理解できるが、荒川ライン下りとは一体何だろうか、まか不思議だ。

この理由はすぐに判明した。実は長瀬には川下りを営業する会社が3社あって、それぞれ荒川ライン下り、長瀬ライン下り、長瀬船下りと称している。名乗った順番は分からないが他社と差別化するためにラインという名前を使用したのだろう。

さて船に乗って川面の出てみると少し蒸し暑い初夏にもかかわらず、水面の涼しさと適度な風によって実に爽快で気持ち良い。その環境からくる清々しさもさることながら、さらに清々しさを感じたのは船頭や助手が若いことで、おそらく10代か20代だろう。いぶし銀のような船頭をイメージしていたが、これは見事に外れてかえって良かった。

その若い船頭の説明もなかなか面白くて勉強になった。例えば“瀬（とろ）”とは河川の流れる中で水が深くて流れの緩やかな場所を指し、荒川の中でもこの付近の流れがゆったりしており長く続くので長い瀬で“長瀬”になったと船頭が説明してくれた。私もそれには目から鱗で、乗客たちもマスク越しに首を縦に振って納得している。

しかし、とはいっても“瀬”ばかりでは川下りのスリリングな体験ができないので、それなりに急で波が立っている場所も通過する。船には水しぶき除けにビニールがついており、それを使って水を防ぐように言われたが、水の量が予想を遥かに超えて大量だったので船の前方に座った鳩原さんと竹田さんは水を全身で浴びた。



<若い船頭>



<ライン下り しぶき除けのビニールも見える>

それはちょうど船頭が長い瀬の話をした後のことで、これは油断させる作戦だったかもしれないと余計な詮索までしてしまう始末だ。よく考えられていると感心したが、彼らは毎日毎日、何回も船を漕いで乗客に感動と思い出を届けるエンターテイメントという仕事をしているのだから当たり前かもしれない。



<荒川ライン下りを終えた 300 オカルテット>

■ 渋沢栄一

2024年発行の一万円札の顔になる渋沢栄一の記念館が同じ埼玉県の深谷市にあり長瀬から車で1時間もかからない場所で、帰途でもあるので訪れた。この記念館は立派な建物でだだっ広い駐車場が用意されて公民館と併設されている。公民館は開館していたが記念館は残念ながら新型コロナウイルスのために休館中だった。

記念館の裏に回ると渋沢栄一の銅像があり、これが高さ5m～6mもあってかなり立派なもので存在感がある。どう考えても建物の裏に設置する銅像ではないので、ひょっとするとこちら側が渋沢栄一記念館の正面であって、駐車場がある方が併設の公民館の入口のように思える。銅像の前には小川が流れてその先は緑の水田が延々と続いている。

この銅像はかなり寸詰まりの感じがする。5～6頭身くらいしかないので、顔が異常に大きいという印象だ。しかし渋沢栄一自身の伸長は150cmくらいだったということで、あながち間違っていないかもしれない。

休館とはいえせっかく来たのだから、近くにある渋沢栄一生地「中の家」に立ち寄った。ここも残念ながら三密になるから建物内部には入れないが、敷地内に入り建物を周りから見ただけでも養蚕の盛んだった当時の豪農の家を存分に感じる事ができた。



<渋沢栄一の銅像>

そして、誰かがここの住所表記に驚いた。それはこの地域が“血洗島（ちあらいじま）”という住所になっているからだ。なんとおどろおどろしい言葉が住所表記になっている。

この名前の由来は諸説あるらしいが、定説はない。もっともらしい説は、その昔にこの地域で合戦があつて自分が流した血や敵の返り血を利根川の水で洗ったという説だ。

さらに時代を遡るとこの地域は先住民族のアイヌが住んでいて、アイヌ語から由来した説だ。例えばアイヌ語で“トネ”とは長いという意味で利根川になった。そしてアイヌ語の“ケッセン”とは岸という意味で、血洗という漢字が当てられた説もある。

さらに血洗島出身の渋沢栄一が次のような話を雑誌に載せている。それは「恐ろしげなるこの村名のかげには幾多の伝説と口碑（言い伝え）とが伝わっている。それは赤城の山霊が他の山霊と戦って片腕をひしがれ、その傷口をこの地で洗ったという」というものだ。おそらく彼は訪れる先々で出身地の血洗島の名前のことを質問されるので、スケール感のある面白いエピソードを使っていたのかもしれない。

補足すると、赤城の山霊とはムカデで、他の山霊とは日光の山霊のことで大蛇だった。この両者の戦いの場は有名な日光戦場ヶ原だったという。

しかし“ムカデの片腕がひしがれ”と言われてもムカデの片腕とは一体何なのか。渋沢栄一には申し訳ないが、私にはどうもこの話は腑に落ちない。

■世界遺産「田島弥平旧宅」

ここまで来ると 2013 年に世界遺産に富岡製糸場と一緒に登録された田島弥平旧宅が近い。

私は車で「富岡製糸場関連の世界遺産に行きますか？」と聞くと、誰かが「群馬県にあるのだから利根川を渡らないといけない」という懸念の声が返ってきた。それは利根川が埼玉県と群馬県の県境だという常識からくるもので当然のことだろう。しかし私の妻の実家はこの近くでその辺の事情は妻からいつも聞いており、群馬県伊勢崎市の島村地区だけは利根川の対岸、つまり埼玉県側にある。おそらくは利根川の蛇行によって変則的な県境になったのだろう。

田島弥平旧宅は、その島村地区にある。血洗島からはすぐ近くなので、車で 5 分もかからずに到着した。田島弥平は明治初期に大きな影響力を持った養蚕業者で、彼の家は自身の養蚕理論に基づいて改築した養蚕用の民家である。近代養蚕農家の原型とも言われるその旧宅が富岡製糸場と一緒に世界遺産に登録された。

尚、この旧家には現在も人が住んでおり内部の見学はできない。

今回ここを訪れて聞いた世界遺産の説明で、田島弥平と渋沢栄一は同時代を生きた親戚だったという事実を初めて知ることになった。

この田島弥平旧宅のすぐ隣には桑畑があつて、緑の桑の葉が生い茂っている。最初は桑の葉に覆われて分からなかったが、よく見ると「島村見本桑園」という看板が立っており桑畑には何種類もの桑の木が少しずつ植えてある。桑の葉は蚕（かいこ）にとっては貴重な餌、つまり栄養源なので絹の糸の研究のためのものだろう。現在も絹や蚕を研究しており、この地域は製糸とともにあるという強烈なメッセージが伝わってくる。同じ蚕でも懐古主義ではなく現在進行形だ。今も研究し続け進歩発展を目指しているとは、さすが世界遺産は違う。



<田島弥平旧宅>



<島村見本桑園 赤い丸が看板>

■旅を終えて

新型コロナウイルス感染症対策の自粛明け初めての旅が終わる。東京・埼玉という地域にあって、奥多摩、秩父、長瀨は意外に面白かった。

緊急事態宣言が解除されたといっても感染リスクはあるので、この時期の旅行は少し勇気がいるかもしれないが、こういう時は何処でもしっかりと対策をしているので実はあまり問題がないというのがよくある話だ。問題になるのは慣れてきてからだろう、人間にとって慣れが油断につながり、一番怖い。

間もなく旅行業界に対する政府の大規模な経済支援が始まり、交通・宿泊などに補助金がでる。これは利用しない手はない。例の10万円の給付もあり、いよいよ旅に出る条件はそろった。

■旅の記録

2020年6月7日(日)～6月9日(火)で行った2泊3日の旅の記録を記す。一人当たりの費用は約35300円、その詳細を以下に記す。

【交通費】(一人当たり約6200円)

- ・神奈川県から走行距離約430kmのガソリン代が約4000円と高速道路2980円、御岳登山鉄道駅駐車場1050円、白雲山鳥居観音入山料500円、三峰神社駐車場510円、以上が共通費用になり、一人当たり約2300円。
- ・御岳登山鉄道ケーブルカー往復1320円
- ・宝登山ロープウェイ往復830円
- ・長瀨ライン下り1800円

【宿泊費】(一人当たり約27000円)

- ・かんぼの宿青梅12000円(500円の割引適用済)
- ・かんぼの宿寄居11000円(500円の割引適用済)
- ・夕食時のビールや追加料理(鮎塩焼き)、夜の宴会のつまみや酒が2日分の約16000円で、4で割って一人あたり約4000円

【昼食その他】(一人当たり2050円)

- ・1日目昼食のカツカレー950円
- ・2日目昼食代わりのみそおでん300円
- ・3日目昼食の佐野ラーメン800円